

智頭の森と村日記⑦

丹羽 健司

●スライドショー

「智頭はずい」の文字が穏やかなBGMの中で浮かび上がった。満員の会場が一瞬しんと静まりかえった。

中野ゆかりさんがこの1年間を映像で振り返って作った。古い写真から始まった。いつの頃だろうか、昭和30年代だろうか、何枚もの写真が聴衆を過去に連れ去った。そしてこの1年、9月の山造り塾。10月の森の健康診断、木の宿場、組手仕、1月の山里の聞き書き塾までが、心地よい音楽にのせてたくさんの写真と短い言葉のテロップを時折はさんで流された。「海から町からそして地元から、力を含わ



つばい涙をためた彼女は「ありがとうございました」というのが精いっぱいだった。そこでまた、満場の拍手。子育て、地域活動、写真館、そしてこのボランティア：一人何役もこなしても弱音一つ吐かず笑顔をやさな



せて頑張った。そして1年、みんなの感想は、一言「智頭はずい」というひとつマだった。たった10分間のスライドショーが会場を一つにして聴衆をどこか違う世界に運んだ。終了と同時に湧き上がる拍手。見渡すと何人も涙をためている。進行役の私もその一人で、マイクを中野さんに向けた。目にい

●木の宿場報告会

報告会は「ほのぼの」で3月5日午後1時、NHKテレビで全国放送された木の宿場二ユースの上映から始まった。懐かしい場面を共有した後、綾木委員長から開会のあいさつ。百人委員会から始まった事業を万感の思いを込めてこれまでの経過を語った。続いて寺谷町長からは、森のようちえんから森林セラピー、そして木の宿場へという大きな流れが今度は商店街を元気にすることへの期待と決意が述べられた。

鹿田鳥取県農林部長の来賓あいさつの後、中嶋健造氏（土佐の森救援隊事務局長）の基調講演「自伐林家で森林と山村を再生する」が始まり、土佐の森の平成の竜馬が吠えた。休憩時間には、11月に国際TVで英語版で放送された木の宿場を上映した。「おお、あいつが英語で喋ってるぞ」と座が和んだ。そして、冒頭のスライドショ

1。次は鳥取大学の永松先生からの「森の健康診断報告」とてもわかりやすく解説して下さった。声高等さんが「智頭の山を自慢したり、知ってもらえうれしかった」。

続いて岡田さんが出荷数量と杉小判発行についての固い話をいつものジョークで随所に笑いを取りながら発表。

山形地区と山郷地区で200戸に対して行ったアンケート調査と出荷者全員に対しての聞き取り調査について、鳥取環境大学の谷口君と武田君が初々しい発表。智頭町の林家のレベルの高さとはうらはらに後継者への技術継承の難しさが浮き彫りになった。木の宿場は気楽さと杉小判効果で山の仲間づくりが進みやすく、それを契機に技術継承の進むことが期待できることなどが分かった。富沢グループで山仕事を愉しんでいる西尾和彦さんがコメント「大変だったけど、仲間と愉しく飲めた」。続いて、鳥取大学の小畑明日香さんが商店調査について発表。商店からは常盤堂の尾崎滋子さんが「山がきれいになって、杉小判の買い物で町が元気になってうれしい。智頭はきつと良くなる」と確信した。

●行列

同じ時間に愛知県豊田市旭地区では木の駅がキックオフされていた。智頭に負けじと軽トラ23台が勢ぞろいしていた。そう



言えば、年末の説明会で智頭の軽トラ行列の写真を見せた時「おおー！」と会場がどよめいた。あれが効いたようだ。智頭の時にやった開会のウッドカットもそのままばくらせてもらった（笑）。

このことを、すなわち、木の駅の兄弟がたった今誕生したことを会場に伝えた。400km離れた地まで届けと連帯の拍手が送られた。

（次回に続く）

なるぞ！ 智頭の農業担い手

農業従事者の高齢化と後継者不足に悩む中山間地域の農業に追い風が吹いています。景気後退やストレス社会の影響もあってか、自然と向き合うことに癒しを求める農業体験や、退職後は田舎に移住し就農・・・など、農林業への関心が高まっています。

（財）鳥取県農業農村担い手機構では「鳥取アグリスタート研修事業」を設け、県内外からの就農希望者を「農業研修生」として採用。研修生が希望する地域での就農体験を通じて自立した営農を支援しています。

この制度を利用し「智頭に移り住んで農業で自立しよう！」と、県外から2名の青年が智頭町に住み込み、1年間の農業研修を始めました。研修生とその受入農家に、農業への思いを聞きました。



研修生の山口さん（前列左）と古谷さん（前列右）



山口敬司さん（34）

これまで、自分自身の能力を活かした仕事は何なのか、試行錯誤しながら営業、販売、製造、サービス業など様々な職種を経験してきましたが、それらは「一生この仕事でやっていこう」と思えるものではありませんでした。

昔から農業には興味があり、以前は大阪自然教室という事業に参加し、智頭町で農業を体験したことがあるんですが、その記憶がずっと心に留まっています。自分自身を見つめ直し、将来を見据え考えた時に「農業だー」と思ったんです。自分ではどうにもならない自然の厳しさに向き合い、身を委



国岡農園 代表 国岡伊平さん

ねながら、自分らしく生きることを楽しみたい。今は農業の知識も技術もないんですが、国岡農園さんでの研修中にできるだけ多くの野菜づくりに触れ「これだけは誰にも負けない」という野菜が作れるよう、努力したいと思います。

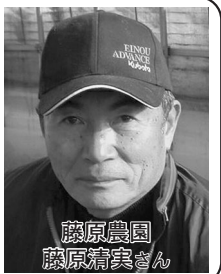
野菜は種を撒いたらそれなりのものはできるかもしれませんが、そうではなく、自分の農法にこだわりと自信をもって「育てる」ときに農業の苦労と楽しみを見出してほしいですね。低農薬栽培を指導し、年間を通じて出荷できる体制づくりを応援したいと思います。



古谷浩平さん（36）

私は、学生の頃から農業に興味があり、鳥取大学の農学部を経て農業に接点のある仕事に就きました。その社会生活の中で様々な人との出会いが自分の人生をもう一度考え直すきっかけになり、自立した農業のプロを目指す決心をしました。しかし、先輩方の話を聞くと、農業という産業で食べていくことの厳しさを感じ、「農業は真剣勝負で臨まなければ通用しない」と痛感させられました。

農業で自立するためには、①良いものを作る技能、②効率を追求する経営力、③商品売る営業力が必要で、この3つ全てを兼ね備えたプロになりたいと考えています。やりがいがあると



藤原農園 藤原寛実さん

10年後の農業は、後継者不足で農地の荒廃がさらに進むだろうと思います。農業の知識経験ともに豊富な古谷さんには、智頭農業の救世主として期待しています。農業で自立できるよう、生産から販売までできる限り応援したいと思います。

思っていますし、農業は産業・文化としての途絶えさせてはならないものだとも思っています。

これまでに就農先を探る中で、智頭町の人情や風景、農林業やまちづくりの取り組みに感銘を受け、智頭町が好きになりました。ここに骨を埋める覚悟で農業に取り組んでいきたいと思っています。

今後、自立した農業を目指し、智頭町の担い手として農業を支えてくれることを期待しています。

皆さんとのふれあいや交流が智頭での生活の励みとなります。第2の人生をスタートさせた2人に温かいエールをお願いします。

新規就農に関するお問合せは 役場建設農林課 国岡 ☎ 75 - 4113 まで